復讐者シャルと聖女イリス

大桜乱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
復讐者シャルと聖女イリス

【Ｎコード】
Ｎ１０４５ＢＡ

【作者名】
大桜乱

【あらすじ】
記憶喪失で森で倒れているところを救われたシャルは冒険者として活動を行い人々の信頼を得ていく。冒険者として活動していく中、ある日懐かしい雰囲気を持つ少女イリスと出会う。シャルの過去に何があったのか？　過去を知ったシャルが選択した行動とは！？
ご意見、ご感想お待ちしています！

プロローグ（前書き）

初投稿ですがみなさんに楽しんでいただける作品を作っていきたいと考えています。ご意見、ご感想お待ちしています。

プロローグ

「助けて！　■■■！」

必死で僕に助けを求める声が聞こえる。僕を呼んでいる。行きたい！　すぐに立ち上がって、もう大丈夫だと安心させてやりたい！

しかし僕は動けない。■■■があんなに叫んでいるのに！　ただ見ていることしかできない！

そして■■■が光に包まれて、僕は意識を失った、、、

「……」

「ーー！」

「いいかげんに起きろーー！」

突然聞こえた大声を聞いて目が覚める、と同時にでかい声をだした何者かを反射的にベッドの上に組み伏せた。

「ちょっと、シャル！　何すんのよ！」

あれ？　よく見るとリタ（借りている宿の娘だ）を組み伏せてる（押し倒しているともいうかもしれない）。リタもなんか顔を赤らめてるし、なんかまずくね？　怒る直前？

「あ、いやごめん。ちょっと夢見が悪くてさ。しかも急に大きい音

がしたからびっくりしたんだ。本当にごめん。」

リタから速やかに離れ、謝った。こういう時は速やかな誠意が肝心だ。

「いや、そんなに謝らなくても……。ってそうだった。早くしないとお母さん、ご飯片づけちゃうよ。急いでね！」

そんなに怒ってないみたいだ、よかった。朝食のためにわざわざ起こしに来てくれたのか。わざわざいいのに。でも今日は俺が冒険者ギルドに登録できる記念すべき日だ！　いつまでも寝てたら幸先が悪い。

今までは1年ほど前に記憶をなくして森で行き倒れてた俺を助けてくれたアーロンさんに世話をしてもらい、シャルルという名前もつけてもらった（愛称はシャル）。

だが今日は独り立ちの日であり、冒険者になっていっぱい稼いでアーロンさんに恩返しができる！　そんなことを考えると気持ちが先走って、1階の食堂までかけ降りた。

食堂ではすでにアーロンさんが朝食をとっていた。

アーロンさんは初老に入るかくらいの年齢の冒険者だ。森で俺を見つけてくれたうえ、見込みがあると言って戦闘訓練や魔法の訓練もつけてもらっている、大恩人だ。怒るとすっごく怖いけど。

「アーロンさん、おはようございます！遅くなってすみません。で

も起こしてくれてもよかったのに」

そういうとアーロンさんは肩をすくめた。

「リタが自分が起こすと言ってな。そういえばリタが顔を真っ赤にして降りてきたんだが、何かしたのか？」

「いや、実は耳元で大きな声で起こされたから反射的に組み伏せちゃったんですよ。はぁ、やっぱ怒ってたか」

「……リタも護身術くらいは習っているとはいえ怪我をしたら大変だ。気をつけなさい」

アーロンさんの言い方に何かあきれたような感じがするのは気のせいだろうか。

「はい。注意します……」

丁度調理場からリタが顔を出していたので、謝っておいた。

「ごめんな、リタ。今日のギルドの仕事で儲けたらなんかプレゼントするからさ！　機嫌直してくれよ」

「ま、いいけどー。期待しないで待ってるわー」

うーむ、なかなか厳しい。これは仕事でがっつり稼いでリタのご機嫌をとらなくては。

リタはこの宿兼食堂（夜は酒場）『森の宿』の一人娘だ。１５歳とまだ若いにも関わらず、リタ目当てに客が来るくらいの器量よし

だ。親方はこの一人娘に甘く、今朝のことがしれたら今日の夕食が危ない！　今日のギルドの仕事に対する決意を新たにする俺だった。

「いってきます！」

ギルドと聞くと中世を思い浮かべる人が多いかもしれない。

しかし最近では魔法と科学の融合によって生み出された魔科学の発展に伴い、技術の進歩がすごい。その最たる物が飛空挺や町を守るゴーレムだ。もっとも飛空艇の運賃は高く、庶民はなかなか乗ることができないが。

魔科学の進歩によって町の中は便利になる一方で、町の外はモンスターがいて危険だ。しかし魔科学の材料の中にはモンスターから得られる物が多く、冒険者ギルドは町の安全や魔科学を支える基盤として多きな意味を持っている。

そうだ、俺が住んでいる世界について簡単に説明した方がいいかもしれない。俺が住んでいる惑星は『ルナ』と呼ばれている。ここ百年くらいの魔科学の進歩でルナは丸い惑星であることが判明した！

それまでは平べったくて海の果てで海の水は空へ昇り、雨となって降ってくるって言われていたんだけどね。

ルナには大陸と呼べる物はが３つしかなくて、いまいる大陸は『セントラル大陸』って呼ばれている。一番大きくて、発展している国が多いからだ。

で、いま俺がいる町は大陸の西の方にある『アルセナ』って国の『セロン』って町だ。小さな町だけど、すんでる人は気のいい人達ばかりですっごくいい町だ！　特産物は森でとれるたくさんの果物！　観光名所は町にあるきれいな自然公園！

ついこの前までこの町に旅行しにきた人に案内の仕事をやったりしてたんだけど、すごい好評だった！　そのまま町に住んじゃおうって人がいたくらいだ。

って町自慢している間に冒険者ギルドについた。アーロンさんと一緒に来たんだけど、寡黙な人だし、冒険者ギルドには何度も一緒に来ているから道中、特に会話とかはなかった。

冒険者ギルドに入ると受付のシャリーさんが営業スマイルで声をかけて来た。

「おはよう、シャル。今日は冒険者の登録に来たのよね？」

「はい。ようやくアーロンさんから許しがもらえたので。登録おねがいします！」

「じゃあこちらの書類に記入と、紹介者はアーロンさんね」

「……よし、これでシャルは今日から冒険者ギルドの一員です！これがその会員証（ギルドカード）ね。ギルドカードはあなたのギルドに関わる個人情報や、現在受け持っている仕事などギルドに関わるたいていのこ

とが閲覧できる端末になっているからなくさないでね。」

そう言って、手のひらに収まるくらいのカードを渡してくれた。

「あとこっちがアイテムを入れるボックスになるんだけど、シャルは持ってるんだっけ？」

アイテムボックスは魔科学の産物だ。値段にもよるが、手に持ちきれないくらいのアイテムを収納できる。しかも収納したアイテムの重量を感じないため、冒険者に限らず生活の必需品だ。

「はい。アーロンさんが若い頃使っていた物を頂きました！」

「そう！　アイテムボックスは冒険者の必需品だけど高いから、よかったわね。募集中のギルドの仕事はそちらのボードに張ってあるけど、今日はどうするの？」

初仕事はずっと前から決めていた。

「今日は腕試しもかねてモンスター退治をしようと思います！」

「あら？　待ちに待った初仕事とはいえ、すごい張り切りようね？　アーロンさん、なにかあったの？」

「……今日中にリタのご機嫌をとれるプレゼントをしないとシャルの夕食がなくなる」

え？　俺だけですか？

「あら？　じゃあはりきらないとね！」

シャリーさんはくすりと笑いながら言った。

「はい！」

頑張ります！　なにせ死活問題ですから！

「頑張って！　仕事がうまく行くよう祈っているわ。倒したモンスターの種類と数はギルドカードに自動的に記載されるから。あとアイテムは隣のカウンターで売ることができるわ」

「モンスターは基本的に何でもいいんですよね。えーと、町の近くに出るのはゴブリン、スライム、オーク、コボルトか。夜になればインプや吸血コウモリ、ウルフもでるのか。よっし、さっそく行ってくるかな」

「いってらっしゃい。シャル、頑張ってね！」

「はい、行ってきます！」

ギルドを出るとアーロンさんと簡単な打ち合わせをした。ギルドの仕事は初めてだが、アーロンさんの仕事を少し手伝ったことがあるし、戦闘技能に関しては問題ないと太鼓判をもらっている。

ギルドに登録することが許可された日には、1年で冒険者をできるくらいに力をつけるとは、なかなかやるじゃないかと珍しく褒めてくれた。

「ではシャル、私は仕事があるからここで分かれよう。今日の夜はお前のギルド登録のお祝いが森の宿である予定だから、夕方までに戻ってリタの機嫌をとっておきなさい」

「分かりました。では行ってきます！」

ベテラン冒険者をここまで神経質にさせるとは。リタ、怖い子！

町の外に出て1時間ほど歩くと森がある。そこは俺が1年前に倒れていた森であり、この町では冒険者になりたてが腕試しにモンスターを狩りに行く場所だ。

アイテムボックスから剣を取り出し、警戒しながら森を散策する。

少し歩くとコボルトが1匹見えた。周りには仲間はいなさそうだ。

モンスターと戦うのは初めてではない。アーロンさんに稽古を付けてもらったときにモンスターとは何度かやり合っている。

仲間を呼ばれないよう風下から注意深く近寄っていく。コボルトは犬がモンスター化したため、嗅覚が鋭い。ある程度近づいたらどうせ気づかれる！　走り、急所を狙って一気に剣を振り下ろした！

モンスターは野生の動物が何らかの要因で魔素（汚れた魔力の一種と考えられている）を浴びて変化した動物と定義されている。また浴びた魔素の量と濃度に応じて強く変化する。

魔素はどこでも発生する可能性があるが、強い魔素は出現する場所が決まっている。そのため町は強い魔素の発生源からできるだけ遠くに作られている。

この森にも発生源があると言われている。でもこの森に出てくるモンスターくらいだったら問題なく、食料の問題も考えてセロンの町は森の近くに作られたみたいだが。

コボルトの死骸から、魔素の固まり（魔石）とコボルトの牙と皮を採取する。

魔石は特殊な加工をすることで魔科学の産物（ゴーレムや飛空挺等）のエネルギー源となり、また魔術師の魔力源ともなるため高値で取引される。

さらにモンスターの爪や牙も魔力を帯びているので加工すればその特性に応じたアイテムとなる。

「コボルトにしては結構大きな魔石が手に入ったな。これは幸先がいいかもしれない。ガンガンいくぜ！」

本日の夕食のためも、モンスター退治に精を出す俺であった。

プロローグ2

アーロンさんは俺にはかなり強い魔力があると言ってくれた。これは俺が冒険者になる上ですごくラッキーなことだった。

魔力は想像を現実世界に顕現させるための媒介だ。魔法の力は想像力と魔力によって決定される。

人間の想像力にある程度限界がある以上、魔力は魔法を行使するにあたって大きなアドバンテージとなる。

多くの魔法使いは想像を確固たるものにするため呪文を用いるが、魔力の多い俺は現象をイメージし、魔力を注ぐだけで魔法を行使できる。

モンスターに囲まれ不意打ちをうけても気配を察知した方向に魔法を打ち込めば撃退できる。おかげで順調にモンスターを退治し、今日の戦利品としては十分な量の魔石とアイテムを回収していた。よしよし。

もう少し狩りをしたら帰ろうかなと、探索を進めていくにつれおかしなことに気付いた。さっきからモンスターの気配がなくなっている。調子に乗ってモンスターを狩りすぎたか？

確かにこの森はモンスターがそれほど多く出現するわけじゃない。町の近くにあるくらいだ。さっきまであれだけのモンスターがいたことだけでも珍しいといえる。

しかし、さっきから得られている魔石は通常モンスターが落とすものより全体的に大きい気がする。

稼ぎも十分そうだし、今日は帰るか？　と考えていると、目の前に、突如４メートルはあるだろう、巨大なモンスターが現れた。

「ガァァァァ！！！！」

叫び声が響く！　オーガだ！　本能でわかる、勝てる相手じゃない、すぐに逃げなくては！

目の前にいるとはいえ、まだ数メートルの距離がある。魔力でけん制し、逃げようと魔法を解き放つ！

しかしオーガは魔法をものともせず、すごい速さで俺に向かい、持っている鉈で俺を、袈裟切りにした……

冒険１日目で死ぬのかよ。まだ町のみんなに何も返せてないのになぁ。くそ、死にたくない……

そして俺は意識を失った……

――――――――――――――――

「おめでとう」

意識が朦朧とする中、人を馬鹿にしたような口調でその科学者は言った。

「君は■■■と相性がいいようだねぇ？　今から■■■が人にどん

な影響を及ぼすか実験するから頑張って生きてね。よいデータを期待しているよ？」

ビー！　ビー！　警報が鳴り響く。

「警報、警報。サンプルナンバーＳ０９が暴走を開始しました。各スタッフは速やかに対処に移ってください」

「残念だ。君はいいサンプルだったんだが、廃棄が決まった。本当に残念だ。バイバイ」

――――――――――――

「ギャァァァァ！！」

オーガの叫び声で目を覚ました。

気付くと、俺の前には肉片を森にまき散らしてオーガが死んでいた。

しかも明らかに致命傷だった俺の傷が治っている。

これは、俺がやったのか？

ゾッとしながらも、いつの間にか日が傾きかけていることに気付いた俺は半ば呆然としながら町へと戻った。

ギルドに戻るとシャリーさんは帰ってきた俺の装備がぼろぼろだ

ったのと、持ってきた魔石の量にびっくりしていていた。

「シャル！何があったの？　大丈夫？　怪我はない？」

やさしい言葉をかけられ、ようやく俺はかなりの緊張状態にあったことに気付いた。なぜか怪我はなく、体も調子がいいんだが精神的な疲れがすごい。

「あ、はい。大丈夫です。心配かけてすみません。それより今回の報酬をもらいたいんですが。」

ギルドカードを渡しながら答える。

「そうね。今日はリタへのプレゼント買わなきゃいけないしね。ってあら？　シャル、オーガを倒したの！？」

オーガは初級冒険者が倒せるような相手じゃない。ベテランの冒険者が数人で倒すような相手だ。

「偶然ですけどね。あまりどうやって倒したのか覚えてないんですよ。多分不意をついて魔法を狙い撃ちしたんだと思うんですが」

「……そう、でもシャルが無事ならよかったわ。はい、今回とれた魔石とアイテムを合わせて、、、１２００００エルになります。すごいわね！　これなら装備を新調してリタにもいいプレゼント渡せるわね」

自分でもびっくりだ。始めての仕事で報酬を得たこともすっごくうれしいけれど、１２００００エルは駆け出しの冒険者が獲得するには破格の報酬だ。

多分オーガからとれたかなり大きな魔石のおかげだろう。

１回のご飯を食べるのにかかるお金はだいたい１００エルくらい。宿にとまると一泊３００エルくらい。１２００００エルという金額は普通の人なら半年くらいならそれなりに遊んで暮らせる金額だ。

「じゃあ、シャル。お疲れ様。あとはリタへのプレゼントを買って今日の仕事は終わりね？」

「といっても何を渡せばいいかまるで分らないんですが。シャリーさん、何かアドバイスありませんか？」

自慢じゃないが俺は女の子にプレゼントなんて全くしたことがない。シャリーさんならいいアドバイスをくれるはず！

「シャルが一生懸命選んだものなら、何でも喜んでくれるんじゃないかしら？　でも一般論で言えばなんかきれいなアクセサリーとかかしらね」

どこかシャリーさんがにやにやしている気がするのは気のせいだろうか。

「なるほど、わかりました！　シャリーさん、ありがとうございました。今日はこれで失礼します

「お疲れ様。頑張ってねー」

町の通りにでると日が傾きかけているせいか、出店が昼間よりも

減っている。早く買わなければ。

道を歩いていると、おしゃれなアクセサリーを広げている店を見つけた。

「いらっしゃい！　お、シャルじゃないか。今日から冒険者ギルドに登録したんだろ？　お祝いに何か買ったらどうだ？　この腕輪なんか旅の守りにどうだい？」

「こんにちは。実は自分のじゃなくて女の子へのプレゼント探してるんですよ。なんかいいのないですかね？」

「お、プレゼントか。いい女でも見つけたか！　じゃあ気合い入れて選ばないとな！」

ただのご機嫌とりですけどね。でも店員さんが気合い入れて選ぶのを手伝ってくれるならいいか。

「これなんかどうだ？小さいがルビーがついたイヤリングだ。シャルもそんなお金持ってないだろうし安くしとくよ！」

赤いルビーはリタの赤味がかかった髪と眼に合いそうだ。

「じゃあ、それにします。ありがとうございました」

４０００エルでプレゼントを買うと（本当におまけしてくれたのか？）、『森の宿』へ向かった。

『森の宿』に入るとリタが駆け寄ってきた。

「シャル、どうしたの、その恰好！　怪我はない！？」

しまった。どうせなら装備も新しくしておけばよかった。

俺は笑いながら、答える。

「見かけはぼろぼろだけど、怪我とかはないよ。軽い怪我はしたけど魔法で直したし、ほら、こんなに元気！」

そう言って、力こぶを作ってみせた。

「……無事ならいいんだけどさ。あと少ししたらシャルのお祝いするから着替えてきてね！」

「待ってリタ。リタにプレゼントがあるんだ。」

調理場へ引き返そうとしているリタを引き留め、俺はリタにイヤリングを差し出した。

「朝は悪かった。とはいえ、俺の初めての報酬で買ったものだから大事にするように！」

「あ、ありがとう。朝のことは別に気にしてないから。私も大声だして悪かったし。ホント、大事にするね。」

リタは驚いた顔をして、嬉しそうにほほ笑んだ。すっごい笑顔だ。将来リタはすごい美人になるんだろうな。

そうぼんやり考えながら自分の部屋へ向かった。

着替えて少し休んでから食堂に降りると、

「シャル、冒険者デビューおめでとう！」

食堂に集まった人たちからお祝いの言葉をもらった。

といっても、みんなこれを口実に飲みたいだけみたいだからすでに酔っぱらっている人がちらほら見られる。せめて俺が来るまで飲むのは待とうよ……

そんなことを考えているとアーロンさんが座っている席を見つけた。

「シャル、今日はどうだった？」

アーロンさんが今日の様子を聞いてくる。

「はい、結果的には大成功です。ただ少し気になる点が」

俺はアーロンさんに、普段よりもモンスターが多く出現したこと、さらには森に通常出ないはずのオーガが出たことを説明した。

アーロンさんは難しい顔をしながら、俺に注意を促した。

「今日、仕事で最近モンスターが活発化しているという噂を聞いた。

何かの兆候かもしれん。お互い気を付けよう」

お互いに気を付けよう、これは俺を1人前の冒険者としてみてくれているから出る発言ではないだろうか。そう考えると、初めて報酬をもらった時以上にうれしさがこみ上げてきた。

「ふむ、ちょうどよかったのかもしれん。シャル、冒険者になった祝いの品だ。受け取りなさい」

そう言ってアーロンさんはきれいな剣を俺に渡してくれた。渡された剣は派手な装飾とかはないけれど、とても手に馴染んだ。

「その剣は魔力を帯びやい金属で作られている。魔力の高いお前が使えば効果的だろう」

「ありがとうございます！　すっごいうれしいです！　よーし、モンスターをガンガンやっつけてくぜ！」

そうと言ったところで、ガコン！　頭に何かをたたきつけられた。

振り向くとトレーを持ったリタがいた。こ、こわっ！

「調子に乗らないの。今日ぼろぼろになって帰ってきたこと、忘れたの？　単純なんだから……、それと、これは私からのプレゼント！」

そう言って後ろに隠していた包みを俺にくれた。

「ありがとう！　お、旅のお守りじゃん。ひょっとしてリタ作って

くれたの？」

「べ、別にいいじゃない。冒険者になった人にはお守りをあげるって聞いたから、それだけなんだから！　と、とにかくおめでとう！」

そう言うと、調理場へ行ってしまった。そんなに急がなくてもいいのに。

それからは代わる代わる先輩冒険者からアドバイスと祝いの言葉をもらった。

ついでにその都度酒を勧められてしまい、まだそんなにお酒を飲みなれていない俺はいつの間にか意識を失った。

第1話

空が赤い。違う。これは焼かれているんだ、僕の村が。

僕は狩りの帰りで、焼ける村へ急いで戻った。

心配だ。父さんも、母さんも、そして■■■も。

目が覚める。頭が痛い。時計を見ると、いつもより早い時間だ。

朝に弱い俺が普段より（リタに強制的に起こされるより）早く起きるなんて。昨日のどんちゃん騒ぎで飲まされた酒のせいに違いない。

頭が痛いのは二日酔いというものだろう。話には聞いていたけれど、最悪だ。飲んでるときは楽しかったけど。

そういえば昨日は祝いの席のはずが、料理に手を出す暇なく酒を飲まされたためかやたら空腹だ。今日の予定は朝食をとりながら考えよう。

隣のベッドを見るとアーロンさんはまだ寝ていた。まだ早いし、アーロンさんは起こさないでおこう。

「おはよう、シャル！　こんなに早く起きるなんてどうしたの！？

何かあった？」

食堂に入ると開口一番リタがひどいことを言ってきた。本当に心配そうにしているから質が悪い。

「いや、何かあったって……、たまたま早く起きただけだよ。それより朝食頼めるかな。昨日はお酒しか飲んでないから多めで。」

「はーい。注文承りました！　お母さん、シャルが朝ごはんだって。大盛りで！」

しばらくするとリタが料理を持ってきた。今日はハムエッグとトーストか。そしてそのままニコニコしながら自分と同じテーブルに座る。

「ねえシャル。今日はお仕事するの？」

「いや、昨日の仕事で装備がダメになったから今日は買い物する予定だけど？」

俺は働かない頭でぼけっとしながら答えた。

するとリタはうれしそうに話しかけてきた。

「今日あたしランチの時間終わったら自由時間なんだ。あたしも買いたいものあるから一緒に行かない？」

おいおい、俺の買い物はどちらかというと冒険者用の装備品だぞ。一緒に買い物してどうするんだ、とはなんとなく言えず。

「そうだな。でも俺の買い物は冒険者用のものだから、昼前にすませておくよ。んで、昼後はリタの買い物に付き合おう？」

おおかた荷物持ちをさせられるだろうから、これが模範解答のはずだ。

「オッケー！　じゃあ昼後にうちに戻ってきてね、絶対だよ！」

部屋に戻るとアーロンさんが起きていた。

「おはよう、シャル。珍しいな、私よりも早く起きているとは」

「おはようございます、アーロンさん。昨日のお酒のせいですよ。朝起きたら頭痛くてびっくりしました」

「ふむ。酒の訓練もしておくべきだったな。昨日はお前の祝いの席だったのに、お前がつぶれた後は私が連中の相手だ。……ただ酒飲めたからいいけどな」

どこかうれしそうな顔で言う。アーロンさんはザルだっていう噂だから、たくさん酒が飲めてご機嫌なんだろう。

朝食から戻ってきたアーロンさんは開口一番びっくりすることを言ってきた。

「実は今日から仕事でしばらくこの町を離れることになった」

え？そんなの聞いてないんですけど。

「何かあったんですか？」

森で拾ってもらってから1年間、ほとんどつきっきりだったから本当にびっくりだ。

「活性化しているモンスターの調査でな。いつ戻れるかわからん」

うわ、ちょっとしんみりしてきた。

アーロンさんは俺の面倒をみるため町を長期に出る用事をできるだけ控えていた。いつ帰れるかわからないってことはかなり長期間町を離れる可能性が高いってことだ。

これは俺が冒険者ギルドに登録したことで、俺がある程度1人でやっていけると考えてくれた上での発言だろう。

「わかりました。アーロンさんが戻ってくるまでに腕を上げてビックリさせてあげますよ！」

「ふん。楽しみにしておこう。だがくれぐれも無理はするなよ」

「わかってますって。期待しててくださいよ！」

さっきは強気で言ったけど、アーロンさんを町の外まで見送るとさみしさがこみ上げてきた。でも、アーロンさんが戻ってきた時に

びっくりさせてやるぜ！

そう決意し、町中へ足を向けた。

第2話

昼食前に『工房』で装備だけ揃えてしまおう。

冒険者の中で『工房』というと、武器や防具、魔法の触媒などを扱っている店を指す。セロンの町には工房は1つしかないけれど、大きな町にはそれぞれの特色を持った工房がたくさんあるらしい。いつか行ってみたいものだ。

「いらっしゃい！」

店に入るなり禿げたおっさんが接客スマイルで迎えてくれた。

こういうとこってしかめっ面の頑固親父が相場だと思うんだけど、店主のドニさんはすっごく陽気だ。二の腕は丸太みたいだけどね。……若干怖い。ちなみに頭にハチマキしてます。

「お、シャルじゃないか！　とうとう冒険者になったんだって？　アーロンから聞いたよ！　今日はアーロンと一緒じゃないのか？」

「おはようございます、ドニさん！　アーロンさんはしばらく町を留守にするそうです。今日は自分の防具を新調しようと思いまして」

そう言いながらアーロンさんがモンスターの活発化の調査に出たことを説明する。

「そうか、それは注意しないとな。他の客にも注意しとくよ！　ん

で、どんなのが欲しいんだ？　シャルは魔法が使えるよな？　そっちに合わせるか？」

「はい、そうします。ただ予算しだいですけどね」

「何言っているんだよ！　お前さんはアーロンの身内みたいなもんじゃないか。出世払いでいいよ！」

おお、太っ腹だ！実際におなかが出ているわけではないけど。

でもさすがアーロンさんだ。普通は支払いのつけなんてものはしてくれない。冒険者、特に魔法を使うことを想定した装備を作るにはそれなりにコストがかかるし、仕事によっては生死に関わる可能性があるからだ。

俺はまだ冒険者として駆け出し。いつかアーロンさんみたいになってみたい。

強い魔力を持っている人は魔力の通いやすい材質で作られた武器や防具を選択することが多い。これはこめた魔力に応じて武器や防具の性能が上昇するためだ。

魔科学の発展に伴い、どのような材質（金属に限らない）が魔力の伝導率や滞留性がよいか、また魔力によってどの程度の性能の上昇を見込めるかが研究されている。

最近ではその研究が応用され、こうした『工房』では使用者に適切な装備品が購入、あるいはオーダーメイドできるようになってい

る。

「魔力量と波長を調べるからそこに座ってくれ」

そういってやたらゴテゴテした装飾が施された椅子を指す。初めて座るわけじゃないんだけど、最初は怖かったな…。なんか電気流されるイメージがあって。

座ると腕や頭に装置を付けられた。

「よし、魔力流してみてくれ。」

言われた通り、付けられた装置に魔力が流れるようイメージする。

「さすが、アーロンの弟子だな。すごい魔力だ！　んで、この波長だったら……」

「あ、ドニさん。俺は戦闘中かなり動くスタイルなんで、材質の柔らかいものでお願いします」

ちゃんと自分の要求は言わないとな。いざ戦闘になったら死活問題だし。

俺はそんなに恵まれた体格をしていない。１５～１６歳という年齢的に（記憶喪失だが）平均よりも少し高いくらいの身長だ。

そのため俺は体躯から生み出される圧倒的な力で相手を倒すような戦闘はできない。でも魔力を通せば攻撃力や防御力を上げられる。

だから魔力に恵まれているらしい俺にとっては身軽な装備のほうが向いている。

「わかった！　じゃあジャケットタイプの防具を作るか！　あと盾は腕輪タイプのものでいいか？　魔力を通せば盾に変わるからな」

一昔前は冒険者がモンスターと戦うときは、ゴテゴテした鎧や盾を持ち歩かなければいけなかった。しかし魔科学の発展によって防具をコンパクト化することに成功している。

持っている魔力量に応じて展開できる物は限られてくるが、少なくとも装備を運ぶ労力が下がった分だけ冒険者の負担は大きく下がった。それによって冒険者の生存率は大きく上昇している。

「お前さんは魔力がかなり高いからな。相当いい材料で作られたものを使えるぞ。……そうだな、ワイバリアはどうだ？　値は張るが長く使えるし、魔力の伝導率と滞留性もいいから防御面もいい！」

ワイバリアはワイバーンの革を特殊な加工をして作られたものだ。高い魔力をもつ冒険者が愛用していることが多い。

「それはぜひとも欲しいですが、いま１００００００エルくらいしかないんですよ。」

ワイバリアを使った装備品ならその１０倍くらいはするはずだ。とても買えない。

「いいって！　出世払いでいいって言っただろ？　それにワイバーンの革自体はアーロンが昔持ってきたものだから、元手はそんなに

かかってないんだ。ただ相場があるから売れずに残ってるけどな」

なるほど、アーロンさんの持ち込みだからこんなサービスをしてくれているのか。それに使う人が限られるから売れずに残ってたのか。ラッキー、なのかな？

「そういうことなら遠慮なく使わせていただきます。とりあえず前金としてこれは渡しておきますね。残りはできるだけ早く渡しにきます！」

「よしっ！　商談成立だ！　明日にはお前さん用に調整したものを渡せるから、都合のいい時に来てくれ！　お前さんの活躍には期待してるからな！」

ドニさんが満面の営業スマイルを浮かべて装備品の購入を終えた。……相変らずドニさんの営業スマイルって怖いんだよな。腕は確かだからいいんだけど。

そう思いながら失礼しますと言って、ドニさんの工房を後にした。

第3話

昼食まで時間があるからギルドで依頼のチェックでもするか。

装備品で結構出費しちゃったから、いい仕事があればいいな。

「こんにちは、シャル！　今日はお仕事？」

ギルドに入るなりシャリーさんから声を掛けてもらった。うん、素敵笑顔だ。これが見たいからギルドへ来たわけじゃないですよ？

「こんにちは、シャリーさん！　実は昼まで時間ができたんで、何か仕事ないかと思いまして」

「そうねー、いま募集されている仕事はそこに張ってあるから見てみて」

そう言って依頼が張られたボードを指さす。

ボードにはたくさんの依頼が張ってあった。その内容は大きく3つに分けられることが分かる。1つめはシャリーさんの言っているモンスターの討伐。2つめはモンスターの一部や魔石の収集。そして3つめが町の人たちからの依頼だ。

実際のところ、ギルドの仕事は今やその業務のほとんどが魔科学関係といってもいいだろう。それだけ魔科学が今の世の中を支えて

いるってことかな。

ギルドにはモンスター退治以外にも、町の人からの依頼が少なからず持ち込まれる。ギルドは元々、困っている人の仲介をするために作られた背景があるからだ。

実は俺がやっていた町の案内もギルドに持ち込まれる仕事の１つだ。アーロンさんが引き受けて俺が案内するってパターンだったけど……。

多分、アーロンさんには俺が早く町に溶け込めるようにっていう意図があったんだと思う。おかげで町の案内をするようになってから、町の人達からも気さくに声を掛けてもらえるようになった。

依頼書の中には他の町への護衛なんかも張られていた。

外の世界か。町の外に出れば、ひょっとしたら自分の記憶を取り戻すきっかけがあるかもしてないんだよな……。いつかは町の外に行きたいな。

そんなことを考えてたら、「緊急、ゴーレムの魔力補充！」と書かれた依頼書が目に入った。

「シャリーさん、ゴーレムの魔力補給なんて珍しいですね？」

通常の魔科学機器は空気中に存在している魔力を自動的に吸収する。でもゴーレムなど大掛かりな機器が活発に動くときは、魔力のある人が定期的に補充しなくちゃいけないことがある。

でも平和なこの町では大気中の魔力と、町の守備隊に配属されている魔導士だけで十分なはずだ。

「最近、モンスターがでる頻度が上がっているせいだと思うわ。ついこの前も町の近くでモンスターが出たらしいの。少しでも魔力のある人は協力して欲しいそうよ」

昨日の森でのこともそれと関係してるのかな？

でもゴーレムの魔力補充か。それなら俺に向いている仕事かもしれない。戦闘面では経験不足を魔力でゴリ押しにしている部分もあるくらいだし。

「シャリーさん、もしよければこの依頼俺が受けますよ。今すぐ行けますし」

「本当！？　助かるわ！　じゃあ、この紙を持って守備隊のダニエルのところに行ってくれるかしら？」

そういってシャリーさんは紹介状を俺に渡してくれた。

「わかりました。さっそく行ってきます！」

「よろしく！　頑張ってね！」

町の守備隊の詰所は町の北側にある。昨日入った森に面したところだ。逆方面にも小さな詰所はあるんだけど、そっちは街道から来る人をチェックをしていることが多い。

「こんにちは！　ギルドの仕事でゴーレムの魔力補充に来ました！」

すると大柄な人がこっちにやってきた。ダニエルさんだ。

「おう、待ってたぞ！　こんなに早く来てもらえるとは、感謝する！」

ダニエルさんはこの町の守備隊の隊長をやっている。頼れる兄貴って感じかな？　しかも剣の腕も相当って噂だ。見ててもスキがない。

紹介状を見せるとさっそくゴーレムのところに案内された。

「来て早々悪いが、頼む」

普段森へ出かけるときに見かけるが、改めて見るとゴーレムは大きい！　４メートルはある。これなら大抵のモンスターは全く問題にならないだろう。

今は整備中なのか、しゃがんでいて、背中の部分から大きな透明な球体、コアが露出していた。コアはわずかに光を発している。

「早速だがコアに触れて魔力を流してくれるか？」

言われるまま球体に魔力を流し込んでいく。そうしていくと少しずつ球体が光っていくのがわかった。

「本来ならうちの魔道士たちがやるんだがな。最近魔力補充が追い付かないんだ」

ダニエルさんは申し訳なさそうに言った。でもそんなにモンスターが増えているのか、一体何があったんだろう。

「いえ、町を守っている守備隊を手伝うのは当然ですよ！　ギルドの依頼で来てますけどね。」

そういうと幾分か気が楽になったのだろうか、ダニエルさんは砕けた調子で話してくれた。

「つっても慌ただしいのは今だけだ。聖女様が今度うちの町にきていただけるそうだからな！」

「聖女様、ですか？　そういう人がいるってことは聞いたことがあるんですが、実際にはどんなことをしている人なんですが？」

「聖女様を知らないのか？　でもそうか、お前は状況が特殊だからな」

ダニエルさんの説明はこうだった。

聖女はこの星の加護をうけた女性に与えられる称号で、世界にも数えるくらいしか存在しないらしい。非常に高い魔力を持ち、また大気中の魔素を中和することができるそうだ。

しかも、今度来る聖女は若く、美人らしい。……それでさっきからダニエルさんのテンションが上がっているのか。

とにかくその聖女様がくればこの騒動もひと段落するってことか

な？　そしたらアーロンさんも早めに戻ってくるかもしれない。

そんなことを話していると、いつの間にかゴーレムのコアがまばゆい光を発していた。

「おいおい、すごいな！　普通、数人の魔道士が交代制で補充していくんだが」

「いや、最初からある程度球体が光っていたからだと思いますよ？　それにかなり魔力使っちゃったんでお腹ペコペコです。」

かなり魔力は使ったが、そんなにすごいことなんだろうか？　でもさすがに結構疲れた。

「いや、本当に助かったよ。そろそろ昼食の時間だろ？　一緒にどうだ？」

ダニエルさんに昼を誘われた！　剣のこととか聞きたい。

はい、ぜひ！　と答えそうになって、なにか忘れていることに気づいた。

そうだ、リタと約束があるんだった。リタの誘いをすっぽかすと後が怖い……、ここは我慢だ！

「すみません。ご一緒したいのはやまやまなんですが、約束があるのでこれで失礼します。次機会があれはぜひお願いします！」

「おう、わかった！　シャリーにはこっちから連絡しとくよ。本

当に助かった。報酬も色をつけとくからな！

ダニエルさんに剣のこととか聞きたかったな、と後ろ髪をひかれながら詰所を後にした。

第４話

ギルドの仕事を終えた俺は『森の宿』へと戻った。

食堂はさすがに昼食時だ。すごく賑わっている。

リタは……、まだ忙しそうだな。昼食の時間が終わってからと言っていたけど、どうせなら一緒に食べたほうがいいよな。

そう考え、自分の部屋に戻ろうとしたときリタがこっちに気付いて声をかけてきた。

「おかえりなさい、シャル！　もうお昼食べた？」

「まだだよ。リタは？」

「あたしもまだだよ。じゃあ、後で一緒に食べよ？」

「オッケー！　じゃあ俺は自分の部屋にいるから終わったら声かけてよ」

さて、リタが来るまで少し休もう。ゴーレムの魔力補充で少し疲れた……。

??????????????

「■■■は将来何するの？」

あんまり考えたことないな。だけど■■■にそう言うのはくやしい。

「あるけど、教えない」

「えー、教えてよー」

「やだよ。もう、すご過ぎて言えないんだ」

そういうと、■■■は拗ねた顔をしてこう言う。

「じゃあ、いいもん。ずっと一緒にいればわかるもん」

？？？？？？？？？？？？？？

「シャル、起きてってばー！」

「あれ？　リタ？」

なんかすごく懐かしい夢を見た気がしたんだけどな……、思い出せない。

「おはよう、リタ。もう仕事終わったの？」

「うん、終わったよ。いつでも出かけられるよ」

あ、本当だ。宿の制服じゃなくて外行き用の格好をしている。

「あ、俺がプレゼントしたイヤリングつけてくれたんだ！」

「うん！　似合う？」

「もちろん！　俺の見立てに間違えはありませんでした」

そう言うとリタは嬉しそうに微笑んだ。やっぱり赤いルビーはリタによく似合っていた。

「シャル、そろそろ出かけよう？」

「オッケー。じゃあ出かけようか！　リタは何食べたい？」

そう言った時、リタが後ろに何かを隠しているのに気づいた。何だろう？

「えっとね、実はお弁当作って来たの！　公園で食べよ？」

マジですか！

自然公園は町の面積の5分の1を占める、『セロンの町』の観光名所だ。町を一望できる高台や大きな池があり、町の人達の憩いの場だ。

公園のベンチに座り、リタの作ってくれた弁当を広げる。

「じゃん！　どうぞ」

お、自慢げだ。でもそう言うだけある。ランチボックスの中には手のこんだ料理が詰め込まれていた。サンドイッチなんてすごくおいしそうだ。

「すごいな！　結構手間かかったんじゃない？」

「そんなことないよ。仕事のついで作っただけだから！」

リタはぶんぶん手を振って答える。いや、かなりかわいいんですけど。宿の客じゃなくて格好いい彼氏でも作って来ればいいのに。リタの理想が高すぎてなかなか彼氏できないのかな。

「じゃあ、いただきます！」

早速目を付けていたサンドイッチを頬張る。う、うまい！

「すごくおいしいよ！　わ、これもおいしい」

本当においしい。たくさんあるからどんどん手が進んでしまう。

「本当！　よかったー。シャルって何食べてもおいしいって言うから、それくらいリアクションないとわからないよね」

え？　そうかな。『森の宿』のご飯は本当においしいからそう言っているだけなんだけど。でもリタも俺が食べてるのを見て嬉しそうにしているから何でもいいか！

「リタも食べなよ。本当においしいよ」

俺ばっかり食べてリタはあまり手をつけてない。こんなにおいしいのに。

「え、あたしはそんなにお腹すいてないから、シャルたくさん食べて！　作るときに少し味見とかしたし」

女の子だし、あまり食べないのかもな。そういうことならたくさんいただきます！

た、食べ過ぎた。まさかあの大きなランチボックスに入った料理をほとんど俺が食べるとは思わなかった。

「ご、ごちそうさま。おいしかったよ」

ちょっと量が多かったけど。

「お粗末様でした！　たくさん食べてくれてよかった」

そうして少しベンチで談話した。リタはすごく楽しそうだった。

「買い物あるって言ってたよね。そろそろ買い物に行く？」

「そうだね。じゃあ大通りの方へ行こう？」

大通りは『セロンの町』の中央を走っている。たくさんの店が並んでいて、各種ギルドやドニさんの工房、リタのイヤリングを買った出店も大通りに並んでいる。

「買い物あるって言ってたけど、何買う予定なの？」

んー、と顎に指を当てながらリタは何か考えている。買いたいものがたくさんあるのかな？

「とりあえず、色々見せ廻ってみよ？」

そう言ってリタは駆け出していく。置いてくなっつーの！

つ、疲れた……。女の買い物は長い、とはよく言う。しかし、まさかこれほどとは。なぜか俺の服も数着買うことになってたし。すでに俺の両手は買い物袋で塞がっている。

『森の宿』についた頃には既に夕暮れ時だった。リタは手伝いがあるから、と言って仕事に行ってしまった。俺はお腹もまだすいてないし、どうせだから森へ行って戦闘訓練でもするかな。

リタと分かれた後、森へ向かった。せっかく冒険者になって森へ自由に行けるようになったんだ。できるだけ経験は積んでおきたい。

夕方の森は視界が悪い。近くにモンスターがいないか探りながら慎重に進む。

夕方あたりから出現するモンスターは昼間に出会うものと異なる。多くのモンスターは夜行性など変化する前の特徴を残していることが多いためだ。また大気に漂う魔力が強くなるせいだろうか、より強いモンスターが活動することが多い。

しばらく歩いているとウルフの群れが現れた。１０数匹ほどだろうか。

飢えているのだろうか、眼がギラギラしている。とても逃がしてくれそうにない雰囲気だ。

アーロンさんにもらった剣を試すいい機会だ。相手してやるぜ！

相手が包囲してくる前に連携を断つ！　俺はアーロンさんからもらった剣に魔力を込めると同時に、ウルフの群れに向かって魔力の弾（エナジーボール）を打ち出す！

ウルフが散開する。俺は各個撃破すべく距離をつめ、近くにいるウルフに魔力を込めた剣で斬りつけた！

すると、まるでバターをきるみたいにあっさりとウルフを真っ二つにした！　すごい！　アーロンさんのくれた剣は俺の魔力とよく馴染む！

ウルフを切り伏せたところで、３匹のウルフが一斉にこっちにやってきた。

まずい、魔法で牽制しないと！　と、思ったところでウルフ達の動きがやたらと遅いことに気づく。

ウルフが遅い？　いや、俺が速くなってるんだ！　魔力で身体能力を上げた俺はウルフの動きを完全に超えていた。

俺は魔力で空中に足場を作り、ウルフ達の真上へ駆け上る！　すれ違いざまに切りつけ、次のウルフへと視線を向ける。

それからは数分とかけずに、ウルフの群れを全滅させた……。

それから何度かモンスターの群れと遭遇したが、何の問題もなく退治することができた。

ゴーレムに魔力の補充をしたときにも感じていたが、戦闘をすると以前の俺より明らかに魔力と身体能力が上がっていることに改めて気づく。

昨日オーガと出会ってからだろうか、悪いことじゃないはずなんだけど気味が悪いな。

そう思いながら歩いていると、きれいな歌が聞こえた。

え、歌？　ここはモンスターが生息する森の中だ。とにかく保護しないと！　俺は歌の聞こえる方へ足を速めた。

すると開けた場所にたどり着いた。幻想的な場所だ。きれいな花々が咲き誇り、ぼおっとした光が漂っている。この場に魔力が溢れているのがわかる。ここに歌の主がいるのだろうか。

そして俺は出会った。きれいな青い髪をした美しい少女、イリスと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1045ba/

復讐者シャルと聖女イリス

2012年1月13日01時49分発行